

論文題目：翻訳から見る日本語・シンハラ語の擬音語と擬態語について  
—その形態と文法機能の異同を中心に—

英文題目：Onomatopoe and Mimetic words in Japanese and Sinhala Languages from the perspective of Translation: Centred on the Differences and Similarities in the Morphological Structures and Grammatical Functions

提出者： Balasooriya Balasooriya Mudiyansele Udani Sugandika

授写機関：宇都宮大学

取得学位の名称：修士（学術）

学位取得方法：課程

取得年月日： 2022 年 3 月 25 日

### 要旨

日本語では日常会話はもちろん、公文書などを除くほぼ全ての文体のテキストにおいて、擬音語・擬態語が頻繁に使用されている。音はもちろん、感情、動き、状態など臨場感をもって表すことが可能であり、日本語表現の豊かさに大きく貢献しているといえる（猪瀬 2010）。シンハラ語とタミル語はスリランカの2つの公用語である。その中でより多く使われているシンハラ語にも擬音語・擬態語は見られるが、日本語ほど多くない。そのため、日本語の擬音語と擬態語の理解や使用は、多くのスリランカ人日本語学習者をはじめ、教師、翻訳者、通訳者にとって大きな問題になっている。本研究はその問題の解決を目指した。

本研究は、翻訳作業を通じて日本語とシンハラ語の擬音語・擬態語を取り上げ、それらを比較・対照し、形態と文法機能の異同を考察した上で、日本語の擬音語・擬態語をシンハラ語に翻訳するための理想的な翻訳方法を検討したものである。両言語の特性を理解し、正確に翻訳をしていくために、より効率的な日本語とシンハラ語に対応できる擬音語・擬態語の翻訳パターンをまとめた。そこでは、西村(2014)が述べている英語と日本語の文法構造の違いによる翻訳の解決策と呉(2005)が述べている日中擬音語・擬態語の理想的な翻訳方法を参考にした。

日本語の擬音語・擬態語の形態的特徴が 16 あるのに対してシンハラ語の擬音語・擬態語には 9 つの特徴が存在する。その中で、両言語とも 2 音節の語根の繰り返しが一番多いことが形態的な特徴であることが明らかになった。また、両言語の擬音語・擬態語が持つ文法機能は同じだった。しかし、連体修飾語として活用するシンハラ語の擬態語と連用修飾語の名詞を修飾するシンハラ語の擬態語の数が非常に少なく、存

在する語句も口語であることが文法機能の特徴である。日本語の擬音語・擬態語の翻訳上の難点は、語が持つ意味の把握の難点、文構造による難点、文法機能による難点と大きく3つに分けられる。それぞれの難点を指摘し、解決するための理想的な翻訳方法を例示した。論文の構成に沿って内容を簡単に紹介しよう。

第1章では、本研究が解決を試みる諸問題に関係する研究の動機・目的、研究課題、研究方法を論じた。

第2章では、本研究が解決を試みる諸問題に関係する先行研究の成果を批判・評価することで、本研究が取る立場を明確にした。

第3章では、日本語とシンハラ語の擬音語・擬態語を比較する上で使う擬音語・擬態語分析の理論的枠組みを明確にした。

第4章では、翻訳上で問題になる日本語とシンハラ語の擬音語・擬態語の特徴を分析し、両言語間の対照言語学的考察によって予想される翻訳上の難点を把握した。それぞれの難点を以下のように大きく3つに分け、それぞれの理由も説明した。難点①は、日本語の擬音語・擬態語が持つ意味の把握の難点である。その理由として、日本語の1つの擬音語・擬態語が複数の意味を持つこと、シンハラ語に存在しない日本語の擬音語・擬態語が表現し難いこと、1つの文に複数の擬音語・擬態語が含まれることが挙げられる。難点②は、文構造による難点である。その理由として、日本語の擬音語・擬態語は訳文で省略可能な場合があること、そのため言葉の前後関係が見落とされることが挙げられる。難点③は、文法機能による難点である。その理由として、連体修飾語や連用修飾語を、それらの文法機能を維持した状態でシンハラ語に翻訳できないこと、「がやがやする」のような擬音語・擬態語をシンハラ語の動詞として訳すことができないこと、文語で書かなければならないため、原文の印象がそのまま伝わらず、訳文では硬い文体になってしまうことが挙げられる。

第5章では、第4章で明らかになった両言語の相違点から予想される翻訳上の難点と実際の翻訳上の難点を挙げ、相互の関連性を検討した。

第6章では、スリランカ人政府登録の日本語・シンハラ語翻訳者に使われている翻訳方法を比較し、日本語・シンハラ語訳の質の向上に有効だと思われる翻訳方法を提案した。日本語の擬音語・擬態語が持つ意味を正確に把握し自然な表現にするための提案として、擬音語・擬態語その部分だけに重点を当てるのをやめ、文脈によって意味を把握すること、シンハラ語の表現法の習慣に合わせて意味を考えること、シンハラ語の文字で書き表し、注釈を付けて言葉の説明をすることなどが挙げられる。文構造・文法機能を正確に把握し自然な表現にするための提案として、シンハラ語の文構

造に合わせて変訳を行うこと、擬音語・擬態語の情報構造を把握すること、文学的な文語の代わりに一般的な文語を使うことが挙げられる。また、日本語の擬音語・擬態語をシンハラ語に翻訳する際に使用できる技法として、加訳技法、意識技法、減訳・不訳技法などの方法が挙げられる。

第7章では、これまでの考察結果を教育観点から見直し、翻訳技法教育及び外国語としての日本語教育において実践できることを提言した。

第8章では、研究の成果・残された課題・今後の研究の可能性をもとに本研究の結論と全体総括を行った。

第4章に論じた両言語間の対照言語学的考察、両言語の相違点から予想される翻訳上の難点、第5章の翻訳データの分析とそこからわかる翻訳上の難点、そして、第6章の翻訳上の難点解決に向けた考察は本研究の内容に大きく関わる課題であり、それぞれについて複数の作品からのデータを収集し、それぞれ別の独立した論文としてまとめ直すことができると思われる。また、本研究によって明らかになったことの翻訳実務への適用、特に擬音語・擬態語翻訳上の難点解決に向けた考察の方法を効果的に習得させるための日本語・シンハラ語翻訳授業のための教室活動の開発とそれぞれの効率性に関して追究の可能性を見出した。それぞれが本研究に続く今後の研究課題である。

本研究は『坊っちゃん』と2種のシンハラ語の訳である“ပုမိစာမူ” (pumicīha - mu) と “අවංක ගුරුවරයෙකුගේ කතාවක්” (avamka guruvarayekuge katabak) に出現する擬音語・擬態語に限って形態的特徴を調べたものであるが、シンハラ語の擬音語・擬態語自体の研究は、本研究の成果を越えてさらに進めていくことができる。シンハラ語の擬音語・擬態語を本研究は網羅的に検討できたわけではなく、本研究が取り上げた以外の形態的特徴も存在する可能性がある。研究をさらに進めるためには、複数の辞書を用いて擬音語・擬態語を集め、それぞれを分析する必要があると思われる。また、本研究では、シンハラ語の擬音語・擬態語の音形と意味との繋がりを子音と母音の組み合わせ、子音、母音、子音と子音との組み合わせなどと系統的に整理しなかった。これらの音形と意味との関連性を両言語間で比較することによって、両言語間の擬音語・擬態語の比較研究をさらに進めることができると思われる。

【参考文献】（本稿の引用文献のみ）

〔日本語；論文・書籍〕

呉 川(2005)『オノマトペを中心とした中日対照言語研究』白帝社

猪瀬 博子(2010)「マンガにみる日本語の擬音語・擬態語手法」『通訳翻訳研究』第10号：161-176. 翻訳通訳学会

夏目 漱石(1950)『坊ちゃん』新潮文庫

西村 香奈絵 (2014)「擬音語・擬態語に関する日英対照研究 -Beatrix Potter The Tale of Peter Rabbit」 他とその日本語訳を観察対象として」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要外国語編』第5巻第1号：55-72. 近畿大学

[シンハラ語；書籍]

රණසිංහ, පී. (1990) “පුෂ්පි හාමු” , එස්. ගොඩගේ ප්‍රකාශකයෝ

සුරවීර, ඒ. ඩී. (1995) “අවුක ගුරුවරයෙකුගේ කතාවක්” , ප්‍රදීප ප්‍රකාශකයෝ

【著者紹介】 BALASOORIYA, Udani 宇都宮大学博士後期課程1年生。翻訳と通訳から外国人日本語学習者向けの日本語教育の可能性への関心から実践と教育研究に取り組む。